

一関地域福祉事業所「なごみ」の経験

思いをささえる事業力 閉鎖の危機を乗り越えて

川地 素睿（日本労協新聞）

みちのく岩手県一関市

一関市といってもなじみが薄いが奥州藤原三代で有名な平泉のすぐそばと言うと、だいたい位置がつかめるだろう。

誰しも子供や連れ合い、両親の名前は忘れないと思いたい。しかし個別的ではあるが高齢に伴う痴呆もある。ひとりぼっちにならない、とじこもらない、仲間をつくる、それがボケを防ぐ。だから場としくみが必要だ。日本の制度は対象を一まとめにして対策を講じることで成り立ってきた。しかしこれからの超高齢社会、必要なものはあるがまますらに認めることだ。そうした意味で、なごみが進めている温泉デイサービスは注目に値する。これなら自分が高齢になっても参加できそうだ。

東北新幹線で仙台と盛岡の間にあるのが一ノ関だ。江戸時代は田村氏3万石の城下町で栗駒山を水源とする盤井川が町の中心を貫いていて、名勝巖美溪の周辺に温泉を配し春と秋とには自然を香らせている。人口63000人、高齢化率約22%（平成12年度）。町の人口はじりじりと減り始めていて、百数十年続いたお菓子屋さんが店を閉めた。とくに農家は高齢の一人暮らし・二人暮らしが多くなっていて、継ぐ人がいなければ、家は絶え

る。

一関駅前には、大槻3賢人と称する銅像がある。3人の男達が、すこし厳しい顔をし顎をひき正面を向いている。蘭学の先駆者であり「解体新書」を完成させた大槻玄沢、開国論者で玄沢の次男の大槻盤溪、その息子の辞書「言海」の著者大槻文彦、いずれもが時代の桎梏を近代に解き放とうとした先人者たちである。保守的ではあるが、ときおり光彩を放つ新しい時代への希求、それがこの土地柄のもつ気質であるようだ。

利用者とみんなに支えられて - なごみを続けてきた。桂田さんから聞く

「なごみ」の開所は、今から3年前の1999年3月1日。その前年、労協と高齢協が協力して開催したケアマネージャの受験講座に参加した桂田静江さん（現所長）と介護福祉士と、ヘルパー講座で知りあった千葉直美さんの3名で立ち上げた。桂田さんは20年間看護婦として病院に勤務。退職後、在宅介護支援センター、特別養護老人センターで働いてきたが、いつも思ってきたのはもっとその人の人生を大切にしたい介護をしたいという思いだった。だから、同じ思いをもった仲間たちと大きな期待に胸を膨らませて船出した。



「介護の社会化」をめざす介護保険制度が、その気持ちを後押ししてくれた。

岩手高齢協の生協法人格を活用する予定だったが、いろんな経緯もあり労協センター事業団の地域福祉事業所として出発することにした。

介護保険制度開始にあわせて2000年1月申請、介護保険制度の開始と同時に認可された。しかし、現実には厳しいものだった。2000年4月は、事業高30万・原価率260%という悲惨な状況だった。あせりと不安の中で、このままつぶすわけにはいかない、仕事を増やすしかない、なんとかしなければという思いで、朝早くから病院や施設をまわったがなかなか仕事に結びつかなかった。一方では経営改善のためみんなの報酬も下げた。それでも改善の見通しが立たず、話し合いで涙をのんで職員も削減した。2000年9月、本部から役員が来て「事業計画と見通しが立たないと、このままでは閉鎖することになる」という話までされた。利用者の立場にたった仕事をしたい、自分たちが納得できる仕事をしたい、思い続けてきた。しかし、「仕事がないと生活できない」と辞めていく人も出てきた。先の見通しが立たない以上、悔しいけれど「いて欲しい」とは言い切れなかった。「労協や高齢協がもっとお金のことも後押ししてくれるはずではなかったのか」と思う事も

あったが、(1)やりたいと思う事を形にするためには、思いだけではすまない、その思いを支える事業力が必要なこと(2)自分たちが立ち上げた以上は、最後のところは自分達が解決するしかないこと。を思いしらされた。

それでも、みんなが「くやしい。つぶしたくない。」と続けることを選んだのは、原価率も120%まで下げることができたこともあるが、なによりも利用者との絆だった。痴呆症で徘徊癖があるSさんは、とにかく5分おきに徘徊するのでどこの施設でも受け入れてくれず「なごみ」にやってきた。眼を放さず正面から向き合って根気よく話し掛ける中で、顔も和らぎやっとなごんできたところだった。すくないけれど利用者もなごみのいこちの良さを理解してくれる。応援団の「なごみ支援会」も励ましてくれる。

「こんど、閉鎖になります。どうもすみませんでした。さようなら」とは、この人達を見ていると言うことはできない。「もう一度チャンスが欲しい、1年間全力でやって閉鎖するどうか自分たちで決めたい」とギリギリの選択をした。

やっと獲得できた一関市委託「いきがいデイサービス」

みんなで、これからどうするか毎日毎日おそくまで話し合った結果、仕事を増やすために外へでること、とくに自治体からなんとしても、仕事をとることを決めた。

何度も何度も足を運び、やっと話を聞いてもらえるようになった。しかし実績がないことと、他の事業者の手前特別扱いできない、といわれた。それでも、もう一度もう一度と訪問を重ねた。

非営利組織であること、地域に根ざした福

祉をやりたいということ、自立する介護をめざしていることを訴え続けた。熱意が実りやっと2001年2月から基準該当サービスとして「いきがいデイサービス」を市から委託してもらう事ができた。

すでに始めていた訪問介護事業と通所介護事業に加えてやることになったデイサービスを、なんとしても成功させたい、どうすれば利用者を増やせるかと考えたとき、頭にうかんだのはここ2年間イベントなどをやる毎に集めてきた500人分のアンケートだった。高齢者がいちばんのぞんでいたのは温泉へいきたいということ。「だったら温泉デイサービスをしよう」と準備をはじめた。他ではどこもやってなかったので、初めての試行錯誤を繰り返しながら、スタッフ・車両・運行・行き先などをどうするか議論を重ねた。なごみ支援会の方からの紹介で、ちょうど事務所から1時間の距離にある平泉富士見温泉の藤原の郷が開館する時期にあたったので「それならいいですよ」と、受け入れてもらうことができた時は本当に嬉しかった。宿のご主人も支援会に入っていた。

閉じこもらない「寝たきりにしない」デイサービス

温泉デイサービスをはじめたら、すぐに病院系や特別養護施設の事業者から圧力がかった。「デイサービスは施設内でやるもの、外へ連れて行くのは問題だ」というのがその理由だ。議員が市役所に「そんな事業者に金をだすな」と文句をいっているという話も聞いた。外へ行くには人手と費用がかかることもひとつの理由だ。

みんなで話し合った。「高齢者がのぞんでいる希望をささえるからこそこのいきがいデイサービスではないのか、竹内先生のいうよう

に「閉じこもり」がないデイサービスにすべきではないのか」というのがみんなの結論になった。自宅に閉じこもりになりがちな人をつれてきて、デイサービスという施設の中だけで、というのは二重の閉じこもりではないのか、歌や風船遊びだけでいいのか、外へ出るデイサービスをすることに意味があると続けてきた。

介護予防というものは「閉じこもり予防」だと思います。閉じこもっていると心身ともにおかしくなるのです。人前に出て、騒いだり楽しんでいる人に痴呆はいません。にんげんは孤独な状態におかれると、身体的面では寝たきり、精神的面では痴呆があらわれてくるようになります。

竹内孝仁先生「介護予防の考え方、進め方」より

2000・12・15講演

市も「市主催の温泉デイサービスを始める」ことになりバックアップの形ができた。1年間続いてきて、評価も高いのがうれしい。温泉デイサービスの様子は、労協新聞2002.4.25号に詳しいので見てほしい。利用者30余名から大きな支持をうけ「閉じこもりで痴呆になるかと思っていた。このデイサービスがあるおかげで、友達ができ何日も前から待ちどろしい」という声もでてきた。毎週1回の温泉デイサービスで交換ノートをつくり、抜粋して文集にした。(定価100



温泉デイサービス

円、希望の方はなごみで取り扱い中)

温泉デイサービスは、この1年間、毎週木曜日に開催してきた。ヘルパーが運転する車で自宅まで送迎する。約1時間の車中での交流も大切にしている。一人が休むとみんなが心配するので、スタッフが欠席者の消息をかならず話すようにしている。自立の人も介護保険適用の人もいる。温泉では輪投げあそびやトランプ遊びと手作りの食事、健康診断、そして温泉に浸かり昼寝する。なんといっても温泉で手足をのぼし蒼い空を眺め空気を嗅ぐ、そのうえ背中もながしてもらうのは心身が休まる。「年取ると、外に出る事がめったにない、自宅まで迎えに来てくれるから、うれしい」「毎週、来ないと1週間が長くなって寂しい、来ない人がいるとどうしたかと心配だ」という人も多いので、欠席の人の消息を話すようにしている。Sさんもお得意の踊りを披露し元気に疲れて温泉に入る。いまはすっかり落ち着いている。

「なごみ」の現在

桂田静江所長以下計5名の常勤者がおり、うち3名がケアマネジャーの資格をもつ。登録ヘルパーは8名、ヘルパーの総稼働時間は400～500時間/月で、年間事業高は2,353万円：原価率68.4%(2001年度)になる。また、支援組織として「なごみ支援会」があり、温泉旅館・新聞販売店・住宅改修会社・福祉用具機器会社などの責任者5名が加わり、新聞広告掲載や温泉利用の優遇協力、講座講師等の協力、生きがいデイサービスの送迎協力などの支援を行っている。

温泉デイサービスは、一人当たり1回4750円の委託費が市から支払われる。それ以外に利用者から実費として1,000円を別途徴収している。年間事業高が302万円になる

が、常勤1名とボランティア2名、送迎用の車も含めた予算になるので経営的には厳しい。市主催の温泉デイサービスは利用者負担を2,000円でやっているの、価格を検討することも考えている。

経営的には、原価率も下がり事業の見通しもでてきたが、課題は多い。

風呂場が狭い。修理したいが、お金の問題もあるし大家さんが改修を許可してくれない。空き物件を捜さなければいけないかとも思う。庭にある倉庫(12坪)が使えればよいのだが。

周りに労協の地域福祉事業所がないので、孤立している気がする。会議でも充分交流できないで終わることが多い。もっとコミュニケーションを図りたい。相談したいことが沢山ある。話を聞いて欲しい。新しい業者も苦戦している。富士通が事業参入した事業所は、半年間ケアプランの依頼が1件もなかったと聞いた。自治体の分析、将来の展望も含めた地域戦略が必要になっているので相談したい。などなど。

地域福祉事業所はまずは思いから出発する。この事業は高齢者の生活に深くかかわる仕事だ。自己満足に終わらしてはならない。だから、旗を立てたらなにながらなくても下ろさない覚悟と見通しが、必要だ。思いを事業にしていく力が必要だ。自分たちの思い、やりたいことを素のままだしあい、みずからの展望をうみだすことでもある。「私たちはこういうことをしたい。だから支えて欲しい」と嘘隠しなく市民に提示できる「本物の事業計画」をつくりあうこと。労協の理念とそれを支える自分達が何を考え、事業所として何を

するのか、それぞれが何をしなければならないのか、してはならないのかがはっきりする。だからこそ、協同労働の労協組合員であらねばならない意味がはっきりする。

危機を乗り越えてきた力と思いは、きっと新しい力を生み出すはずだ。

みちのくの新緑は、鮮やかで深い。深さゆえに道に迷うことがあるが、光はいつも天上にあり、幾多の思いと声が路を拓く。進取の気風をもったなごみの活躍に心から、期待したい。

事業所データ

企業組合労協センター事業団

一関地域福祉事業所「なごみ」

〒021-0011 岩手県一関市山目町1-11-5

TEL 0191-31-3347 FAX 0191-31-3348

